

ぐどうなかやまいせきぐん  
具同中山遺跡群 - 2

県道中村下ノ加江線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書

2000年  
高知県教育委員会  
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



## 序

四国の約40%を占める高知県は、南四国と呼ばれ独自の文化圏を誇る地域です。県西南部の幡多地域では四万十川の支流である中筋川流域に周知の遺跡が多く存在し、河川改修、道路建設等近年の公共事業の進捗により、これまで数々の遺跡が明るみにされてきました。

今回、報告いたします具同中山遺跡群（2）も中筋川流域の道路建設に伴う発掘調査で得た資料であります。具同中山遺跡群は古墳時代の祭祀跡が数多く調査されてきており、西日本のなかでも有数の規模を誇る遺跡の一つです。また、中世においても中筋川を流通の動脈とした要的な集落であったことが調査成果から考えられます。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして高知県中村土木事務所の埋蔵文化財に対する深い御理解と御協力を賜ったことに心から謝意を表するとともに、調査報告書作成では関係各位の皆様にも多大な御指導並びに御教示を頂いたことに厚く御礼申し上げます。

平成12年11月

財団法人 高知県文化財団 埋蔵文化財センター  
所長 門田 伍朗



# 例 言

1. 本書は、県道中村下ノ加江線緊急地方道路整備事業に伴う具同中山遺跡群 - 2の発掘調査報告書である。
2. 具同中山遺跡群は高知県中村市具同に所在する。
3. 調査は、高知県中村土木事務所の委託を受け、(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センターが実施した。
4. 調査期間  
平成11年6月1日～平成11年8月31日
5. 調査面積  
345m<sup>2</sup>
6. 調査体制
  - (1) 総務担当  
島内信雄(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター次長兼総務課長)  
大原裕幸( 同 主幹)  
大橋真弓( 同 臨時職員)
  - (2) 調査担当  
(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター 調査課長 西川裕(平成11年度)・重森勝彦の指導のもと以下の体制で調査を行った。  
廣田佳久(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター 調査第四班長)  
久家隆芳( 同 調査員)  
岡崎真紀( 同 測量補助員)
7. 本書の執筆・写真撮影・編集等は久家が行った。
8. 現地調査及び本報告書を作成するにあたり、松田直則氏・廣田佳久氏・前田光雄氏(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター)をはじめ(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センターの諸学兄に御指導・御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。
9. (1) 発掘現場作業員  
猛暑を厭わず作業に従事して下さった皆様に対し、記して感謝の意を表したい。  
岡崎桂子 岡本里以 沢田建男 前田耕作 森本勝一 山脇良幸
- (2) 整理作業員  
宮地佐枝 橋田美紀 飯田 縁 岡本智子 黒岩佳子 澤本友子 益井和子
10. 出土遺物については「99-4GNS」と注記し、関連図面・写真等とともに(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センターで保管している。



# 目 次

序・例言

目次・挿図目次・Tab.目次・写真図版目次

## 第 章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境 .....	1
(2) 歴史的環境 .....	1

## 第 章 調査に至る経過と調査の方法

(1) 調査に至る経過 .....	4
(2) 調査の方法 .....	4

## 第 章 調査成果

(1) 調査概要 .....	5
(2) 基本層序 .....	7
(3) 検出遺構 .....	8
(4) 出土遺物 .....	10

## 第 章 まとめ

(1) 具同中山遺跡群 - 2で検出したピットについて .....	13
(2) 小円礫について .....	13

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

## 挿図目次

Fig. 1	中村市位置図	1
Fig. 2	具同中山遺跡群周辺の遺跡	3
Fig. 3	調査区位置図	4
Fig. 4	区検出遺構全体図	6
Fig. 5	区検出遺構全体図	7
Fig. 6	Aセクション断面図	5
Fig. 7	Bセクション断面図	5
Fig. 8	- 2下層確認トレンチ断面図	5
Fig. 9	- 3下層確認トレンチ断面図	5
Fig.10	ピット・土坑 平面図・断面図	8
Fig.11	遺物出土状況平面図・垂直分布図	9
Fig.12	遺物出土状況平面図・垂直分布図	10
Fig.13	出土遺物実測図(1)	11
Fig.14	出土遺物実測図(2)	12

## Tab.目次

Tab. 1	遺物観察表	15
--------	-------	----

## 写真図版目次

PL. 1	第 区遺構完掘状況・第 区遺構完掘状況
PL. 2	Bセクション断面写真・ - 3セクション断面写真
PL. 3	Pit完掘状況・P5セクション・出土遺物
PL. 4	出土遺物
PL. 5	出土遺物



# 第 章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

## (1) 地理的環境

中村市は高知県の西部に位置する。総面積は384.50km<sup>2</sup>、人口約35,000人であり、宿毛市とともに幡多地域の中心的な役割を果たしている。中村市を流れる四万十川は高知県と愛媛県の県境にそびえる鳥形山と不入山に発し、松葉川となり仁井田台地で流れを西に変える。中村市に入り中筋川と後川が合流し太平洋に注ぐ。

中筋川は宿毛市山田に発する山田川・横瀬川と、三原村に発する平田川が有岡で合流し、向きを東に変え四万十川に合流し太平洋に注ぐ。四万十川へは現在実崎で合流しているが以前は坂本であった。中流と下流の高低差がほとんどなく、河床は海拔0m以下の部分もあり洪水の原因となってきたが、その一方で明治末まで舟による運搬が行われており、物資の流通に一役買ってきた。

中筋川の沖積作用で形成された中筋平野は中村平野の大部分を占めており、具同中山遺跡群は中筋川の自然堤防上及び沖積平野に位置する。

## (2) 歴史的環境

旧石器時代 双海中駄場遺跡ではホルンフェルス製のナイフ形石器が出土している<sup>(1)</sup>。

縄文時代 中期から後期・晩期の土器が出土している。船戸遺跡(5)からは片粕式・北久根山式系統の土器群と西平式・伊吹町式を中心とした土器群が出土している<sup>(2)</sup>。晩期の主な遺跡には中村貝

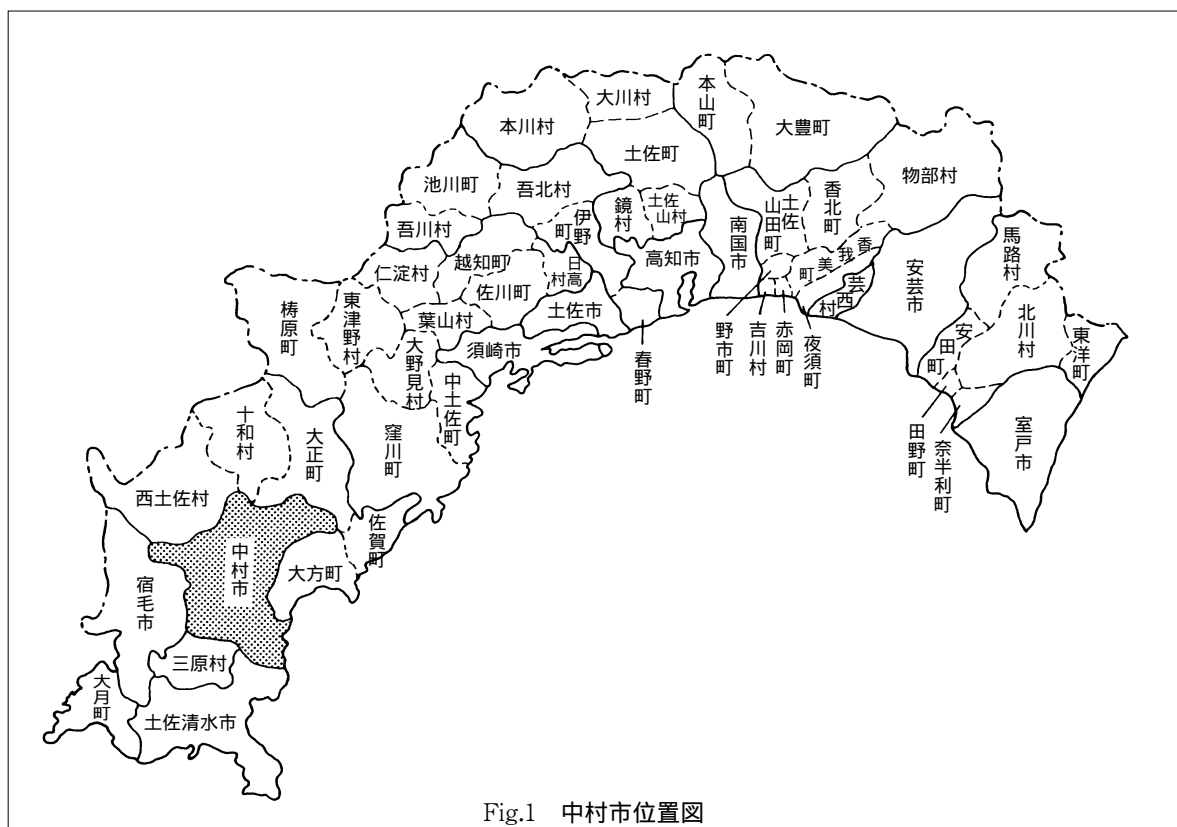


Fig.1 中村市位置図

塚・入田遺跡・具同中山遺跡群などがある。

**弥生時代** 弥生時代の考古学的な調査は1952年の日本考古学協会による入田遺跡(11)の発掘調査に始まる。縄文晩期土器である入田B式土器と弥生時代前期土器である遠賀川系土器(入田式)との共伴が明らかとなった。入田式土器は縄文時代晩期土器と共伴することから四国最古の遠賀川系土器と認識されてきた<sup>3)</sup>。入田遺跡(中村市)では前期、具同中山遺跡群からは前期中～末、西ノ谷遺跡では前期末の土器群がそれぞれ出土している<sup>4)</sup>。また、国見遺跡(2)では前期中葉の竪穴住居跡1棟を検出し、出土土器は遠賀川系土器のみである<sup>5)</sup>。

中筋川流域では銅矛が2本出土している。1本は石丸遺跡(現、具同中山遺跡群)から中広形式が出土しており、もう1本は伝山路遺跡から中広形式が出土しているが、両方とも出土状況は不明である<sup>6)</sup>。

**古墳時代** 宿毛市平田に高岡古墳群・平田曾我山古墳の前期古墳が相次いで築かれる。高岡山1号墳・2号墳はともに長径18mの楕円形を呈する。高岡山1号墳から筒形銅器・青銅製小棒が出土し、高岡山2号墳からは内行花文鏡が1面出土している<sup>7)</sup>。続いて曾我山古墳が築造され、これらの前期古墳は中筋川流域における盟主墳であると位置づけられている<sup>8)</sup>。その一方、中筋川流域の具同中山遺跡群(1)(中村市)では弥生時代後期終末から古墳時代中期にかけての水辺の祭祀跡が多く検出されており、5世紀末～6世紀初頭に最盛期を迎える。その後、祭祀行為は後川の古津賀遺跡に移り終焉を迎える<sup>9)</sup>。

**古代** 『倭名類聚抄』によると中村市は幡多郡に該当し、幡多郡には大方郷・鯨野郷・山田郷・枚田郷・宇和郷の五郷が存在する。具同中山遺跡群は山田郷に推定される。船戸遺跡からは8世紀～9世紀にかけての遺物がまとまって出土している。遺構では自然流路跡以外は検出されなかったが掘立柱建物群が存在していたと推定されている<sup>10)</sup>。風指遺跡(7)から緑釉陶器がまとまって出土しており祭祀跡と考えられている。

#### 註

- 1 木村剛朗 1995年 『四国西南沿海部の先史文化』 幡多埋文研
- 2 出原恵三・松田直則・曾我貴行・坂本憲昭・竹村三菜・武吉眞裕 1996年 『船戸遺跡』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 3 岡本健児 1961年 「入田遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会編
- 4 山崎正明他 1997年 『具同中山遺跡群』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 5 曾我貴行 1994年 『国見遺跡』中村市教育委員会
- 6 『中村市史』 1969年
- 7 山本哲也 1985年 『高岡山古墳群発掘調査報告書』高知県教育委員会
- 8 山本哲也 1997年 「四万十川流域における前期古墳の成立とその背景」『海南史学』第35号
- 9 出原恵三・廣田佳久・松田直則 1988年 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県教育委員会
- 10 前掲書註2

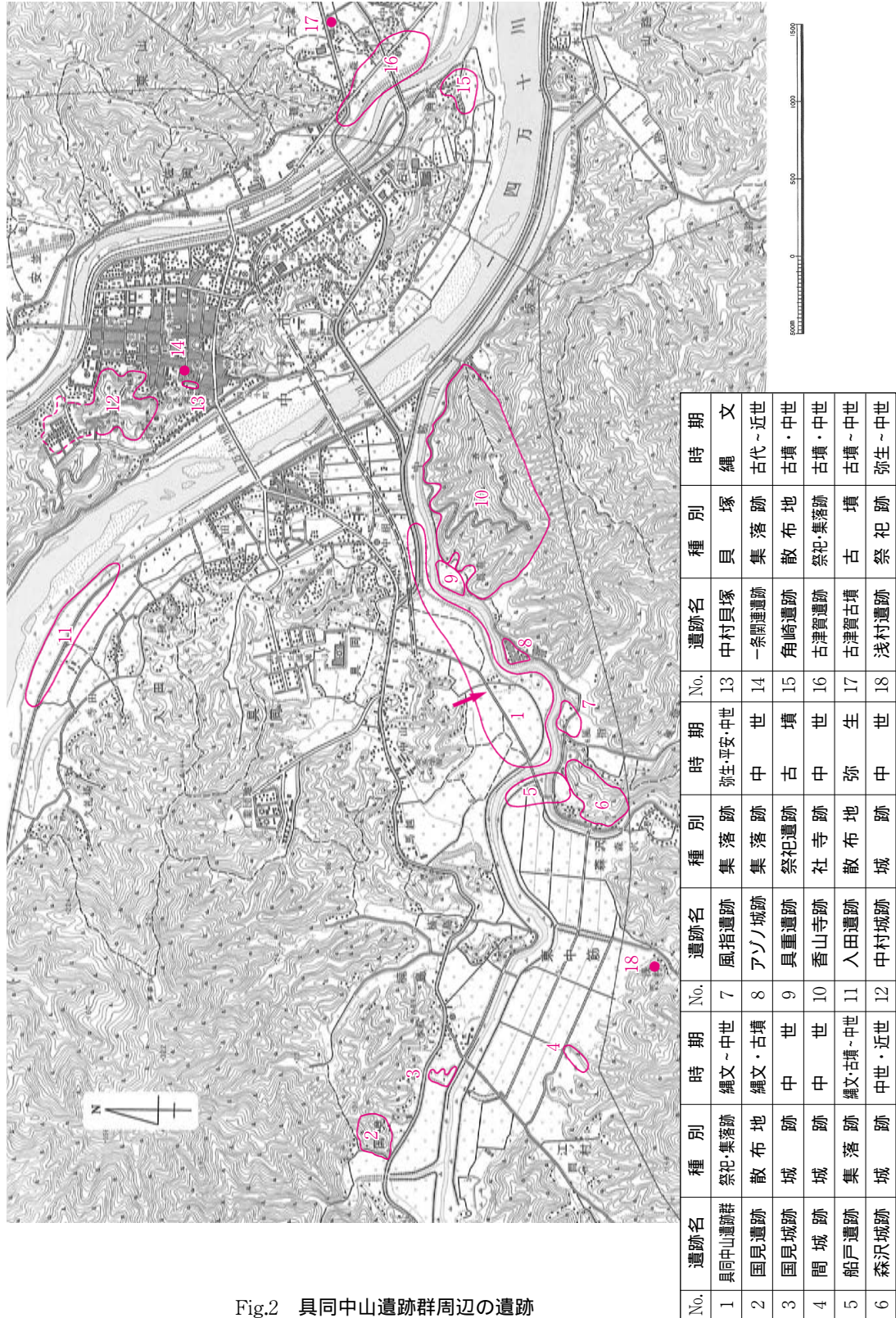


Fig.2 具同中山遺跡群周辺の遺跡

# 第 章 調査に至る経過と調査の方法

## (1) 調査に至る経過

幡多地域では土佐くろしお鉄道の整備、中村宿毛道路の建設など徐々にではあるが、交通網の拡充が進行しつつある。この傾向は県下においても同様であり、高知空港の拡張、四国横断自動車道の延伸、高知新港の建設などが実施されている。こうした交通網の整備は利便性の向上のみならず、物流をスムーズにし人的交流を促進させ地域の経済・文化の発展に寄与するところが多い。

県道中村下ノ加江線建設予定地内の中筋川沿岸は具同中山遺跡群など遺跡密集地域である。高知県教育委員会は埋蔵文化財の取り扱いについて、高知県中村土木事務所と協議をおこなってきた結果、道路建設で破壊される箇所については記録保存を目的とした発掘調査を実施することで合意した。平成11年6月1日付けで高知県と(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センターとの間で委託契約を締結し、同埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。

## (2) 調査の方法

試掘調査および隣接した地区での調査結果をもとに、表土から約1.5mの無遺物層の掘削を委託した。調査区は 区(西半部)と 区(東半部)にわけ調査を行った。遺物包含層については人力により掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。また、掘削深度が地表下3m以上と深いため調査区壁面の崩落を防止し、安全に調査を実施する目的で県道に接する南側および東側には鋼矢板を打設した。一方、北側および西側の壁面は傾斜をつけ掘削しさらに軽量鋼矢板を打設した。遺物の取り上げは主にトータルステーションを用いた。必要に応じ、写真撮影及び公共座標をもとに平面実測をおこなった。

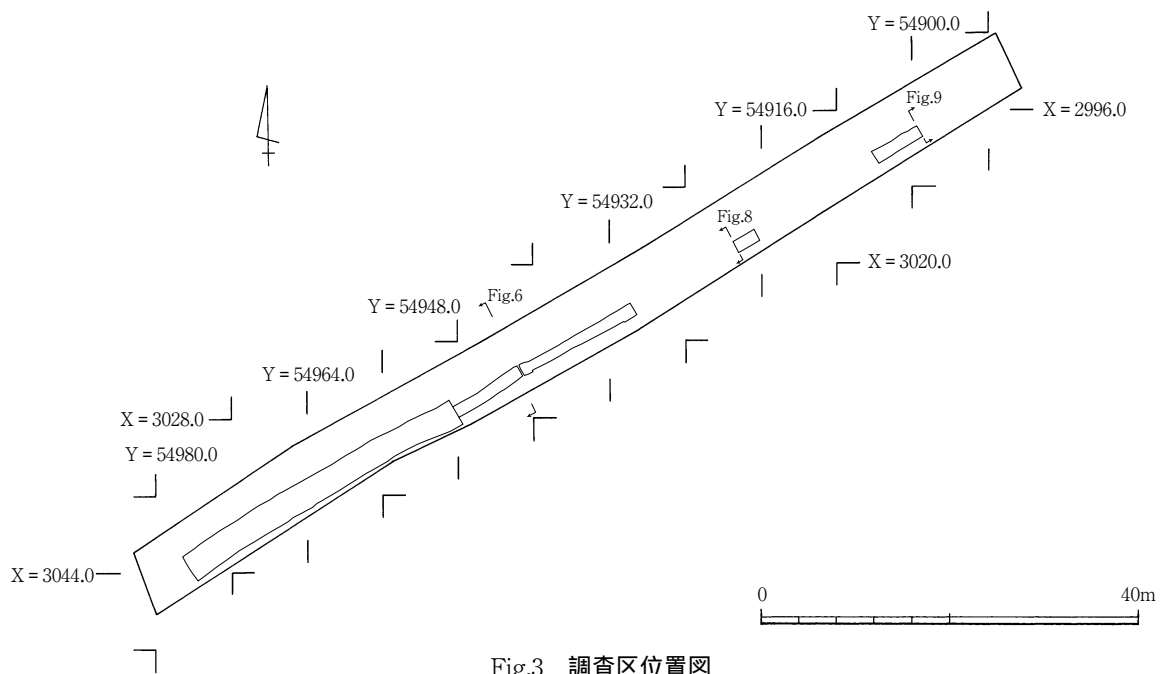


Fig.3 調査区位置図

# 第 章 調査成果

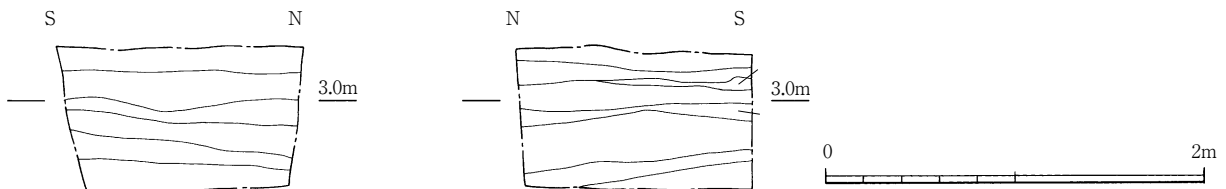
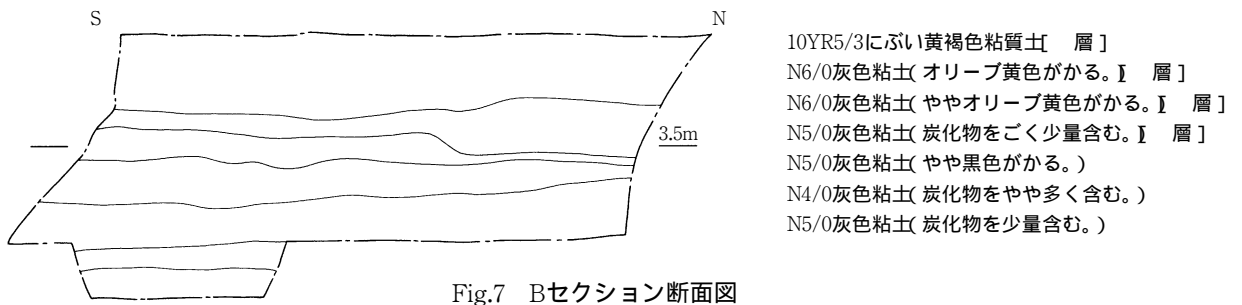
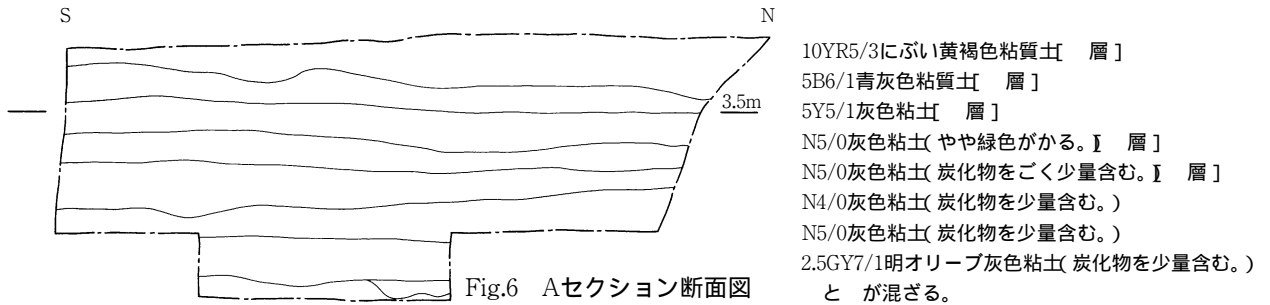
## (1) 調査概要

現況では調査区西部は石垣を境として標高が低くなっていた。各層も基本的には現況同様、西にいくにつれ標高が低くなる傾向がある。また、周辺の調査成果および現況を考慮に入れると、北方向にむかい標高が低くなるものと考えられる。

遺物は主に弥生時代後期末～古墳時代前期初頭、古墳時代中期のものであり、散発的な出土にとどまる。

遺構は調査区西部を中心にピット・土坑を検出することができた。調査区西部のなかでも西端部付近は比較的明瞭な遺構が多く、東にいくにつれ不明瞭である。これらの時期については遺構からの出土遺物は皆無に近く断定することはできない。

その他では直径約1～3cmの川原石がまとまって出土した。



N5/0灰色粘土(炭化物をごく少量含む。)

N5/0灰色粘土(炭化物を含む。)

N5/0灰色粘土(やや緑色がかかる。炭化物を少量含む。)

2.5GY5/1オリブ灰色粘土(やや灰色がかかる。炭化物をごく少量含む。)

2.5GY5/1オリブ灰色粘土(炭化物をごく少量含む。)

N5/0灰色粘土(炭化物を少量含む。)

7.5Y5/1灰色粘土(炭化物を少量含む。)

N4/0灰色粘土(炭化物を少量含む。)

7.5Y5/1灰色粘土(やや緑色がかかる。炭化物を少量含む。)

N4/0灰色粘土(炭化物を少量含む。)

7.5GY5/1緑灰色粘土

7.5Y5/1灰色粘土(炭化物を少量含む。)

N4/0灰色粘土(炭化物を少量含む。)

7.5Y5/1灰色粘土(炭化物を少量含む。)

Fig.8 - 2下層確認トレンチ断面図

Fig.9 - 3下層確認トレンチ断面図



Fig.4 区検出遺構全体図

## (2)基本層序

調査区に直交する方向に設定したAセクション、Bセクションで基本層序を観察した。遺物包含層は大きく ~ 層に分層できる。層はにぶい黄褐色粘質土層であり、A・Bセクションとも層が該当する。層は青灰色~オリーブ黄色がかった灰色粘質土層であり、Aセクションでは層が、Bセクションでは・層がそれぞれ該当する。層は灰色粘土層であり、Aセクションでは ~ 層が、Bセクションでは層がそれぞれ該当する。区はAセクションの層を除去して遺構を検出した。

Aセクションの ~ 層は無遺物層である。

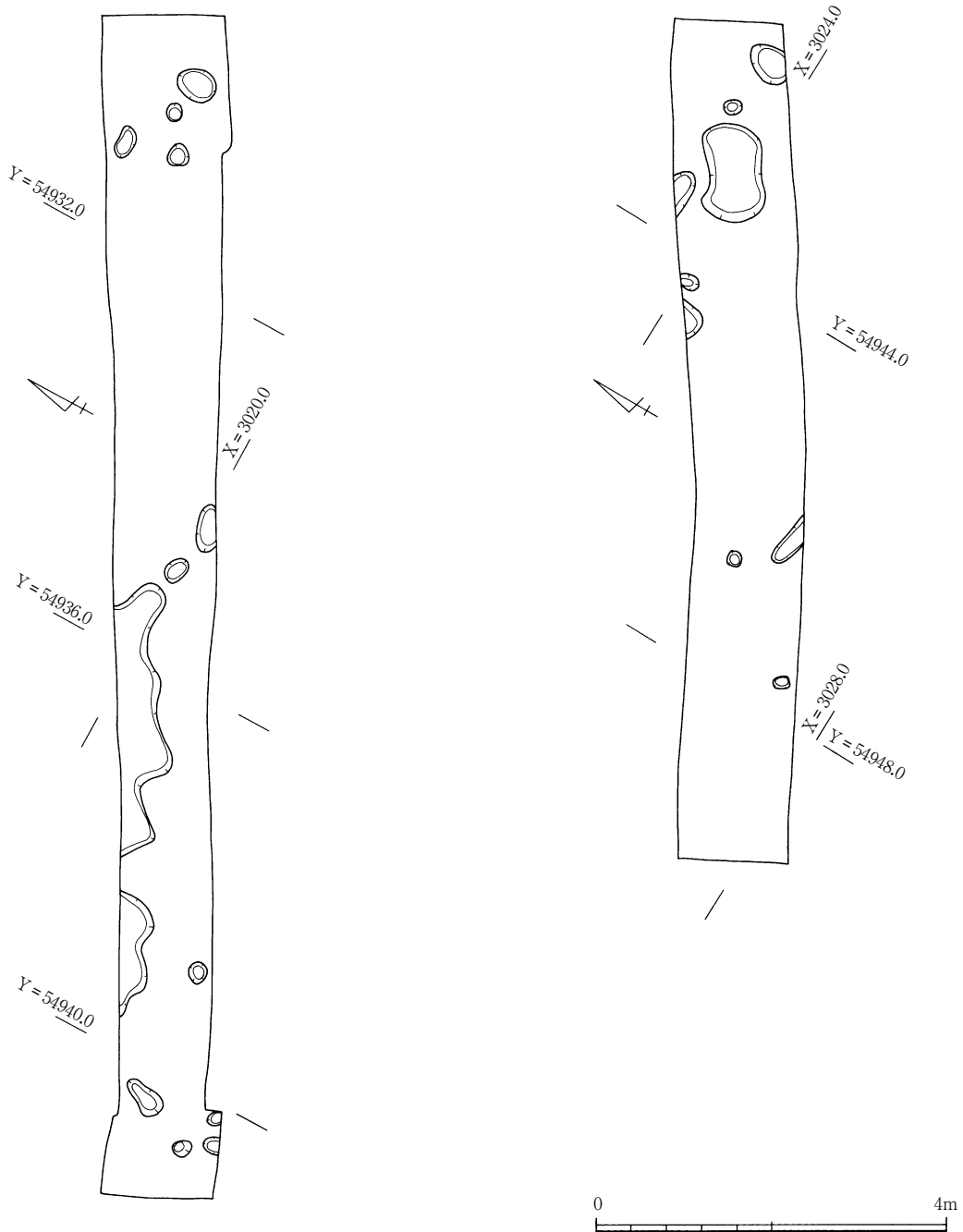


Fig.5 区検出遺構全体図

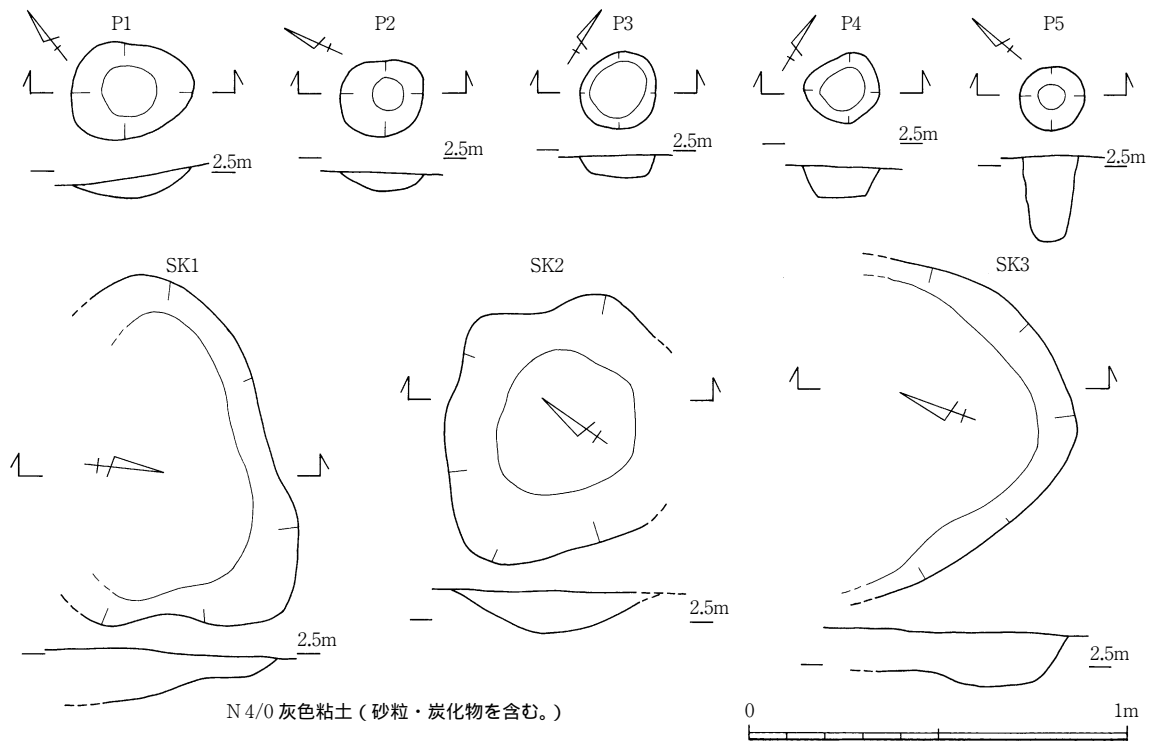


Fig.10 ピット・土坑 平面図・断面図

中村宿毛道路調査区との関係を検討すると、特徴的な層序がなく対応関係を想定することは困難であるが、概ね 層は第15層に、 層は第21層、 層は第24・25層（アラビア数字は中村宿毛道路調査区の層序である。）にそれぞれ対応すると考えられる<sup>(1)</sup>。

註(1) 廣田佳久・畑中宏一 2000年 『具同中山遺跡群 -2』 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

### (3)検出遺構

Aセクション 層上面でピット群、土坑などを検出した。遺構は調査区の西端部付近に集中しており、東半部には存在しない。

SK1は 区西端付近で検出した土坑である。長軸約0.9m、短軸約0.55m、深さ約0.15mの規模である。遺物は出土しなかった。

SK2は 区西端付近で検出した平面形が不正円形を呈した土坑である。直径0.6m、深さ約0.1mの規模であり、断面形はレンズ状を呈する。遺物は出土しなかった。

SK3は 区東端付近で検出した土坑である。半分以上が調査区外にのびるものと推定されるため、平面形態・規模については不明である。深さ約0.15mであり、壁はしっかりと立ち上がる。遺物は出土しなかった。

P1は 区西端付近で検出したピットである。長軸約32cm、短軸25cm、深さ約6cmである。遺物は出土しなかった。

P2は 区西端付近で検出したピットである。直径約22cm、深さ約5cmである。遺物は出土しなかった。



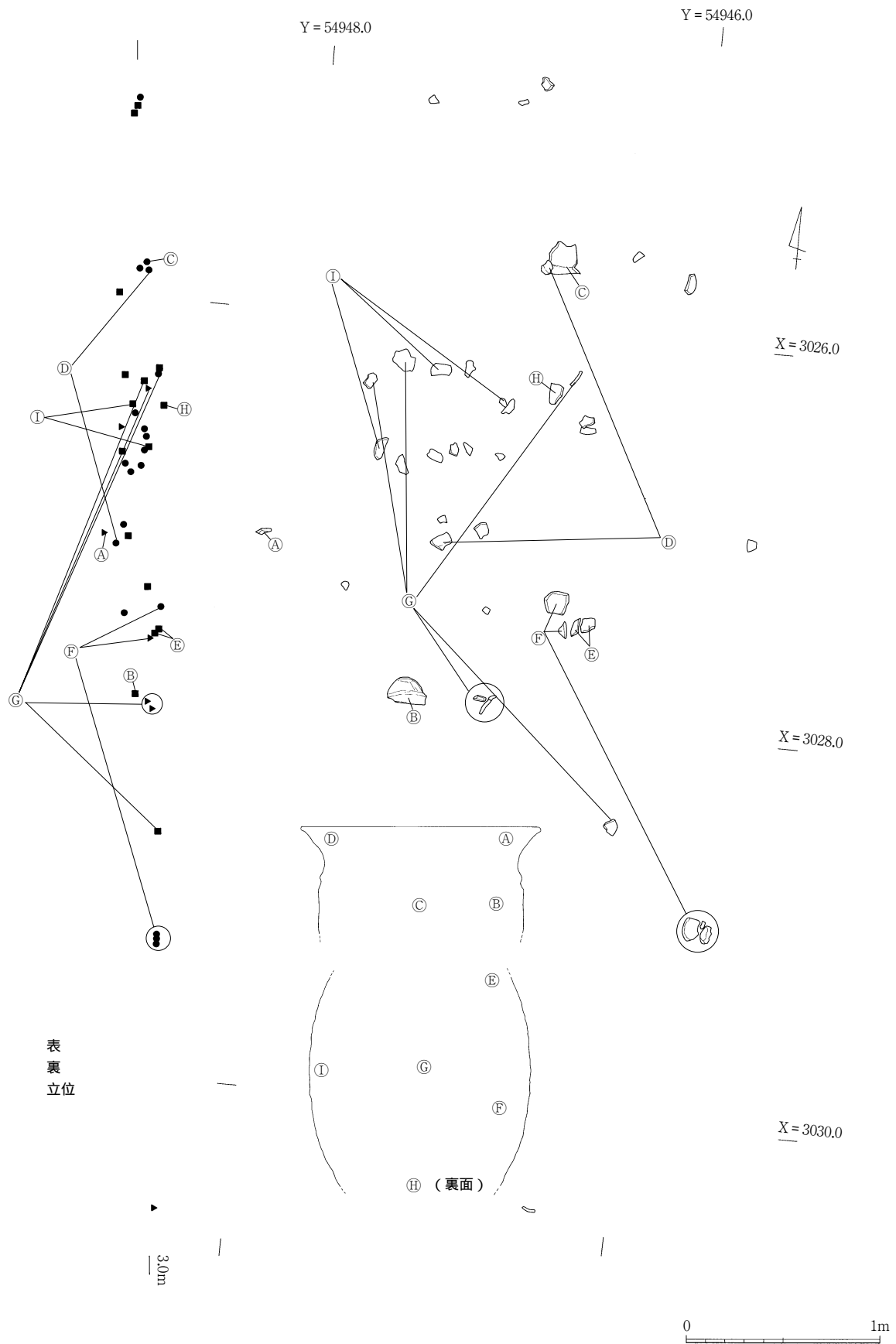


Fig.11 遺物出土状況平面図・垂直分布図

P3は 区西端付近で検出したピットである。直径約20cm、深さ約5cmである。遺物は出土しなかった。

P4は 区西端付近で検出したピットである。直径約20cm、深さ約8cmである。遺物は出土しなかった。

P5は 区東端付近で検出したピットである。直径約14cm、深さ約24cmを測り、検出ピットのなかでは最も深いものである。遺物は出土しなかった。

その他のピットについても深さが10cm前後のものが大半を占める。これらの遺構の所属時期については上述のように出土遺物が皆無であり明確にすることはできない。

弥生終末から古墳初頭の甕 ( Fig.14 - 18・19 ) 1個体が3×6mの範囲で出土しており、接合関係及び復原した状態での部位を確認するため、それぞれの破片に番号を付け遺物の取り上げを行った。しかし、口縁部と体部～底部が接合できず、また接合できなかったものが多くあり分析にはたえ難いものとなった。

小円礫が 層から集中して出土した。小円礫は直径約1～3cmである。基本的にシルト層の堆積であり、川原石が混入することはなく、これらは自然に堆積したものとは考えられない。

#### (4)出土遺物

出土遺物が少なく、 ~ 層で時期的な区分も困難であることからここではまとめて報告する。1～4は椀である。1は底部から口縁部まで湾曲しながら立ち上がる。色調は赤褐色を呈する。2も1と同様、底部から口縁部まで湾曲しながら立ち上がるが2の口縁端部が直立する点が異なる。5は鉢である。やや突出した平底の底部から内湾気味に立ち上がる。外面には叩き目が残存する。6～8は高

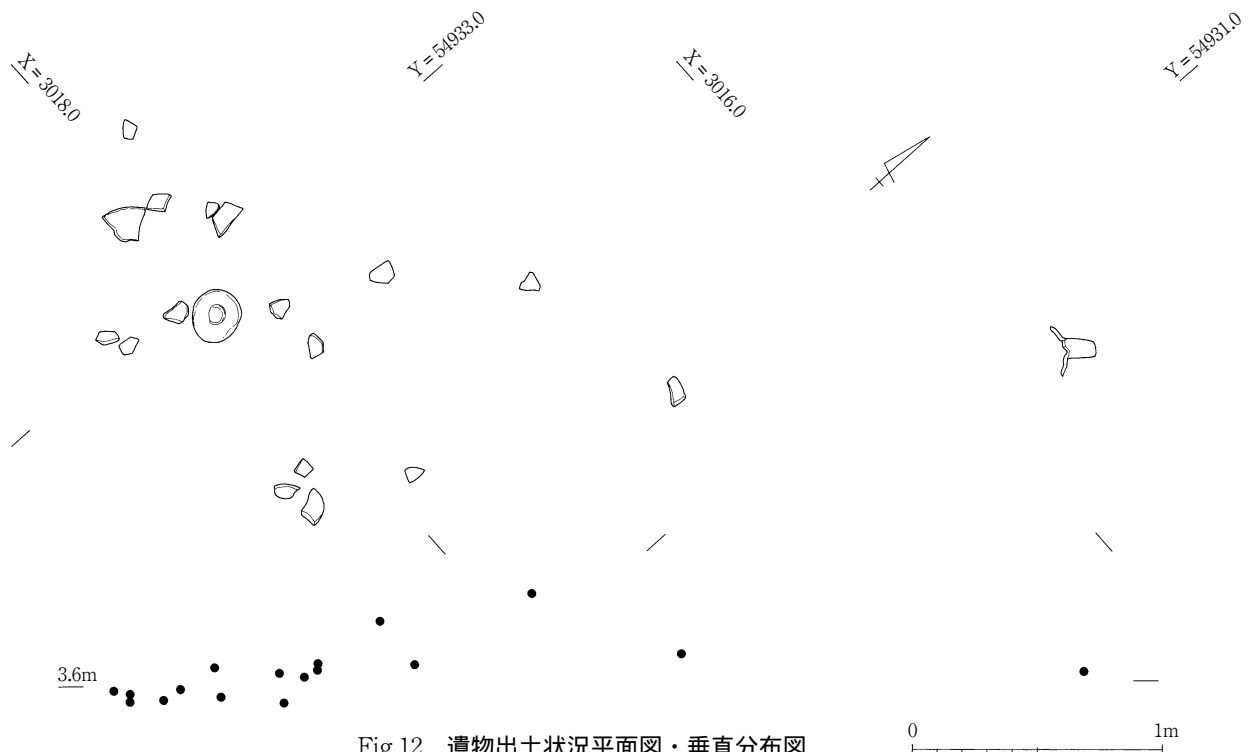


Fig.12 遺物出土状況平面図・垂直分布図

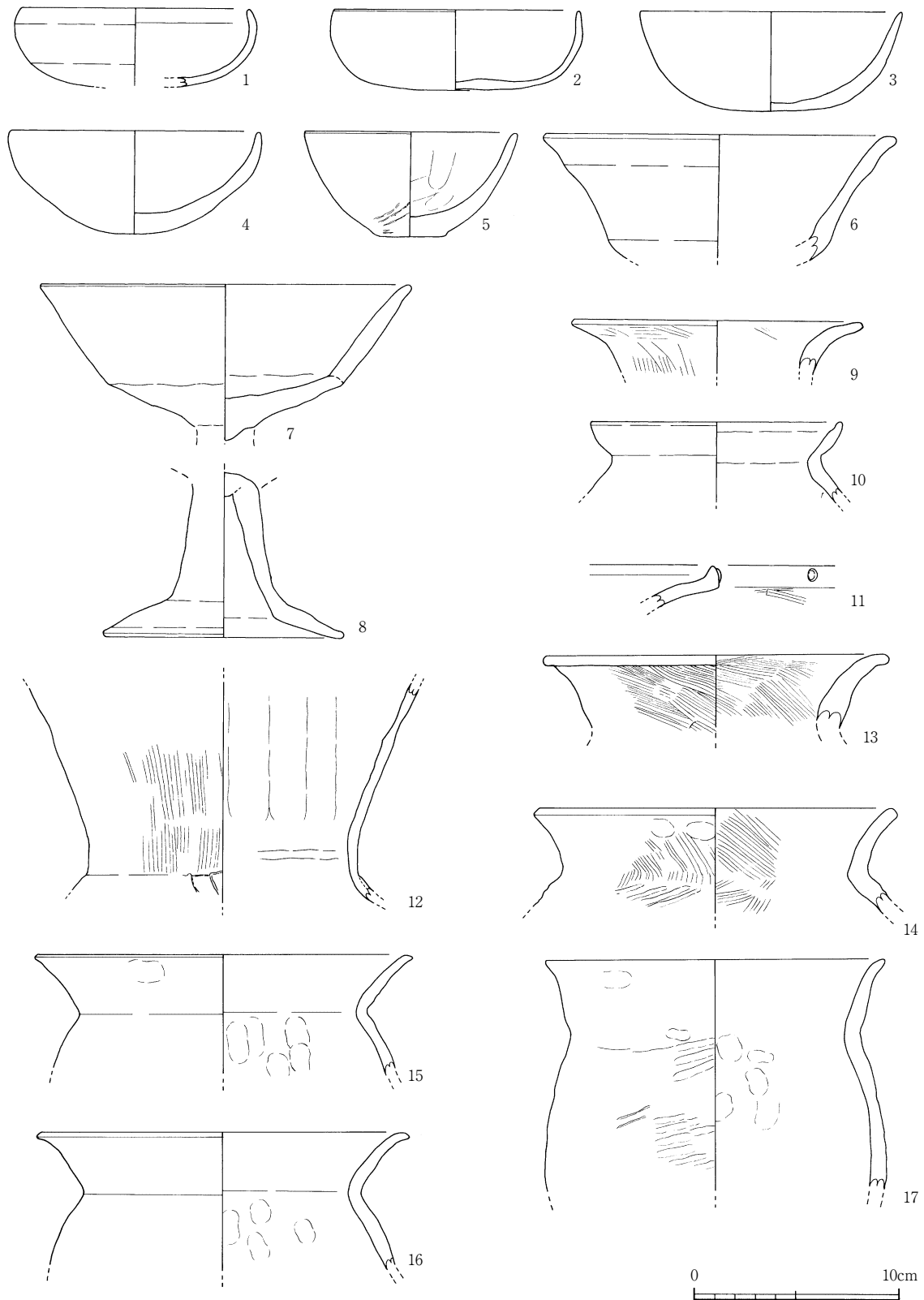


Fig.13 出土遺物実測図(1)

杯である。8は細身の脚部から裾部が大きくひらく。9~12は壺である。9は口縁端部付近で大きくひらく。内外面ともハケ調整を施す。10の頸部は「く」の字状を呈し、口縁端部は内側に若干肥厚する。11は口縁部をつまみ出し、外面に楕円形の浮文を貼付する。12は肩部から口縁部は直線的に立ち上がる。頸部には押捺突帯を貼付する。頸部外面は縦方向のハケ調整を、内面には縦方向のナデ調整を施す。全体的に器壁は薄い。13~19は甕である。15の頸部は「く」の字状を呈する。外面には煤が付着する。18はあまり張らない胴部から口縁部は外反する。外面全面に細かなハケ調整を施す。体部外面の一部には叩き目が残存する。外面に煤が付着する。19は18と接点はないものの同一個体と考えられる。外面は18同様、叩き成形後細かなハケ調整を施す。内面にはハケ調整を施す。24は須恵器のqである。体部最大径部分と肩部に稜が巡り、これらの稜の間に波状文を施す。外面下半に静止ヘラケズリ調整を施す。26は叩き石である。両面および側面全周に敲打痕跡が認められる。

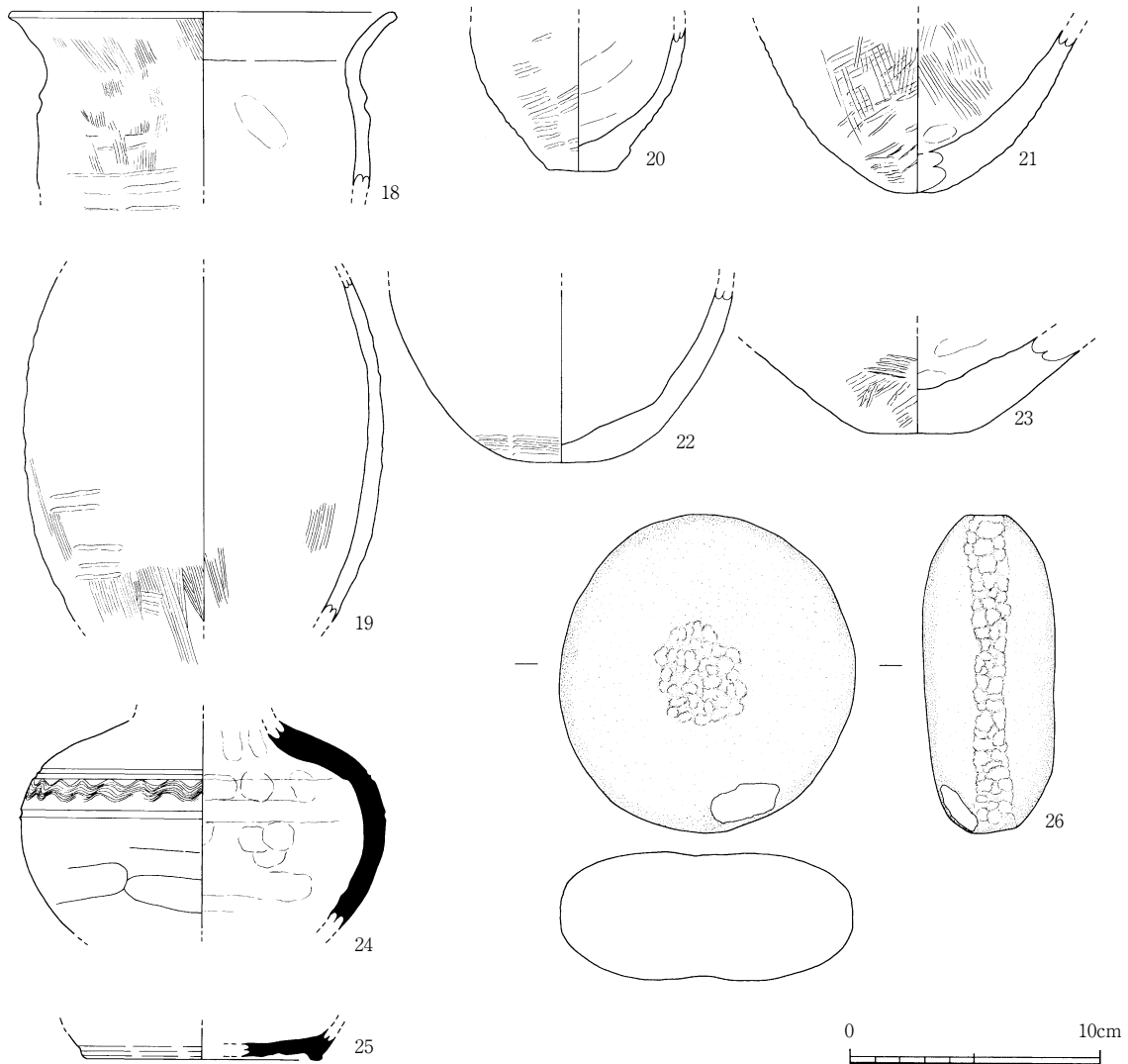


Fig.14 出土遺物実測図(2)

## 第 章まとめ

### (1) 具同中山遺跡群 - 2で検出したピットについて

今回の調査成果の一つがピット群の検出である。これらの位置づけについては柵列、掘立柱建物になる可能性が指摘されている<sup>①</sup>。

まず、これらの基礎的な確認をおこなうことから始める。県道・建設省部分ともにピットの規模は直径約20cm、深さ約10cmである。立地については相対的に標高の低い場所に位置している。このことから、居住をおこなう掘立柱建物、倉庫的な掘立柱建物を想定することは難しい。また、ピットで囲まれた範囲に特に土器が集中することもなく直接的に祭祀に結びつけることもできない。

一方、立地に注目すると上述のように低湿地に接してこれらのピット群が存在している。当調査区と具同中山遺跡群 との間は試掘調査の結果では遺構・遺物ともにほとんど検出されておらず、低湿地であったと推定される。また、空中写真による古地形分析でも同様の結果を得ている<sup>②</sup>。したがって、ここでは治水及び利水に関するものである可能性を指摘しておきたい。

以上、ピット群の性格についていくつか挙げることはできるがそれぞれに決定できるような根拠は乏しい。

### (2) 小円礫について

具同中山遺跡群・古津賀遺跡で検出された礫を含む祭祀跡について集成し、若干の検討を加えていきたい<sup>③</sup>。具同中山遺跡群は中筋川の、古津賀遺跡は後川の自然堤防上に立地しており層序はシルト層・粘土層などを中心とした堆積層で構成されているため礫は含まない。したがって礫が出土した場合、故意に持ち込まれた可能性が高く、礫も祭祀跡を構成する要素の一つであると考えられる。

具同中山遺跡群ではSF1・2・4・SX7・SF13・16・17(以下では具SF1と省略する。)<sup>④</sup>、古津賀遺跡ではSF1・2・3・4・7・9・10・11(以下では古SF1と省略する。)<sup>⑤</sup>から礫が出土している<sup>⑥</sup>。

#### 出土状況の分類

類：土器に入れられた状態で出土するもの。

A類：土師器甕に入れられたもの。(具SF4・17・古SF2・4・11)

B類：土師器椀に入れられたもの。(具SF4)

C類：須恵器杯に入れられたもの。(具SF4・古SF7・10)

類：土器には入れられず、祭祀跡周辺で検出されたものがある<sup>⑦</sup>。(具SF1・2・13・16・17・SX7・古SF1・2・3・9・-2)

時期的には具SF2が5世紀後半に比定されており、類が類よりやや早い段階で出現するが、5世紀末～6世紀初頭の段階には他類もすべて出現している。類では土師器甕・須恵器杯などの器種に限定される点、礫の形状、大きさについてある程度のまとまりがみられる点<sup>⑧</sup>などから何らかの規

制を読み取ることができる。また、各種模造品ではほとんどのものが土器に入れられた状態では検出されないことから、それらとは異なった使用方法が考えられ、祭祀行為での意味の相違が伺える。

註

- (1) 廣田佳久・畠中宏一 2000年 『具同中山遺跡群 - 2』 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- (2) 筒井三菜 2000年 『具同中山遺跡群 - 1』 建設省・高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- (3) 報告書に記述されているもの以外にも、写真図版等で礫の出土が確認できるものもあるが、これらについては詳細が不明であり今回は省くことにする。
- (4) SF1・2・4・SX7は出原恵三・廣田佳久・松田直則 1988年 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書』 高知県教育委員会、SF13・16・17は前田光雄・松田直則・廣田佳久他 1992年 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書』 高知県教育委員会・(財)高知県埋蔵文化財センター
- (5) 出原恵三・廣田佳久・松田直則 1988年 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書』 高知県教育委員会
- (6) 浅村遺跡からも4cm大の円礫が出土しているが、被熱している点、出土状況から支脚として利用された可能性があり、今回は対象から除外する。久家隆芳 1999年 『浅村遺跡』 高知県教育委員会・(財)高知県埋蔵文化財センター
- (7) 本来は土器の中に入れられていたものが土器の崩壊などにより、土器外に出たものを含んでいる可能性がある。
- (8) すべての事例の礫に関して細かな記述はないが、形状は大半が円礫であり、大きさは1~20cm大である。

Tabl 遺物観察表

Fig. No.	図版番号	出土層位	器種	法量 (cm)				色 調			胎 土	特 徴
				口径	器高	胴径	底径	内 面	外 面	断 面		
13	1		椀	(11.0)				2.5YR4/6 赤褐色	2.5YR4/6 赤褐色	2.5YR4/6 赤褐色	直径4mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、調整不明。
13	2		椀	(11.8)	3.9			2.5YR4/6 赤褐色	2.5YR5/6 明赤褐色	7.5YR5/6 明褐色	直径4mm大以下の砂粒を少量含む。	内外面、調整不明。
13	3		椀	(12.6)	4.8			7.5YR6/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	内外面、調整不明。
13	4	-	鉢	(12.0)	5.0			5YR7/4 にぶい橙色	5YR7/4 にぶい橙色	5YR6/1 褐灰色	直径6mm大以下の砂粒を含む。	内外面、調整不明。
13	5		鉢	(10.2)	5.1	3.5		10YR8/3 浅黄褐色	2.5YR2 灰白色	2.5YR2 灰白色	直径6mm大以下の砂粒を含む。	外面、叩き成形後、ナデ調整。外面、煤付着。
13	6		高杯	(16.8)				2.5YR5/6 明赤褐色	2.5YR5/6 明赤褐色	10YR5/1 褐灰色	直径5mm大以下の砂粒を含む。	内面、不明。外面、ナデ調整。
13	7		高杯	(17.8)	7.5			5YR6/4 にぶい橙色	5YR6/6 橙色	10YR5/1 褐灰色	直径9mm大以下の砂粒を含む。	内外面、調整不明。
13	8		高杯			11.5		7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	直径4mm大以下の砂粒を含む。	内外面、調整不明。
13	9		壺	(10.8)				5YR6/6 橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ハケ調整。
13	10		壺	(12.0)				5YR5/6 明赤褐色	5YR6/6 橙色	10YR6/4 にぶい黄褐色	直径4mm大以下の砂粒を含む。	内外面、調整不明。
13	11		壺					5YR6/8 橙色	5YR6/4 にぶい橙色	10YR6/4 にぶい黄褐色	直径5mm大以下の砂粒を含む。	内面、不明。外面、ハケ調整。口縁部外面に浮文を貼付。
13	12		壺					2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y7/2 灰黄色	N4/0 灰色	直径5mm大以下の砂粒を含む。	内面、ナデ調整。外面、タテハケ調整。頸部に押捺突帯を貼付する。
13	13		甕	(16.4)				5YR7/3 にぶい橙色	5YR7/3 にぶい橙色	10YR6/1 褐灰色	直径5mm大以下の砂粒を含む。	内外面、ハケ調整。
13	14		甕	(17.0)				10YR7/3 にぶい黄褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい褐色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	口縁部内外面、ハケ調整。肩部外面、叩き目が残る。
13	15		甕	(18.0)					5YR6/6 橙色	5Y6/1 灰色	直径5mm大以下の砂粒を含む。	内外面、調整不明。外面、煤付着。
13	16		甕	(17.4)				5YR7/4 にぶい橙色	5YR6/8 橙色	5YR7/4 にぶい褐色	直径6mm大以下の砂粒を含む。	内面、ナデ調整。外面、調整不明。
13	17	-	甕	(16.4)				7.5YR7/6 橙色	10YR7/6 明黄褐色	10YR7/4 にぶい黄褐色	直径7mm大以下の砂粒を含む。	外面、叩き目が残る。
14	18・19		甕	(15.0)				7.5YR6/3 にぶい褐色	5YR6/3 にぶい褐色	7.5YR6/3 にぶい褐色	直径6mm大以下の砂粒を含む。	内面、ハケ調整・ナデ調整。外面、叩き成形後、ハケ調整。外面、煤付着。
14	20		甕			2.6		10YR6/3 にぶい黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	10YR7/3 にぶい黄褐色	直径2mm大以下の砂粒を含む。	外面、叩き目が残る。
14	21	・	甕			2.0		5YR5/4にぶい 赤褐色	5YR5/3 にぶい赤褐色	5YR5/4 にぶい赤褐色	直径4mm大以下の砂粒を含む。	内面、ハケ調整。外面、叩き成形後、ハケ調整。外面、煤付着。
14	22		甕					5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	10YR7/4 にぶい黄褐色	直径6mm大以下の砂粒を含む。	外面、叩き目が残る。
14	23	・	甕			4.0		10YR5/3 にぶい黄褐色	5YR6/4 にぶい褐色	5YR7/4 にぶい褐色	直径5mm大以下の砂粒を含む。雲母含む。	外面、叩き目が残る。
14	24	-	q			(14.5)		N7/0 灰色	N7/0 灰色	5RP6/1 紫灰色	直径3mm大以下の砂粒を含む。	内面、ナデ調整。体部下半、静止ヘラケズリ。
14	25	-	杯			(9.2)		7.5YR7/3 にぶい褐色	7.5YR8/4 浅黄褐色	7.5YR7/3 にぶい褐色	直径2mm大以下の砂粒を含む。	焼成不良。
Fig. No.	図版番号	出土層位	器種	法量 (cm・g)				石 材	特 徴			
				全長	全幅	全厚	重量					
14	26		叩き石	12.6	11.9	5.1	1200.0	砂岩	両面、側面全周を使用する。			





# 写真図版





第 区 遺構完掘状況



第 区 遺構完掘状況

PL.2



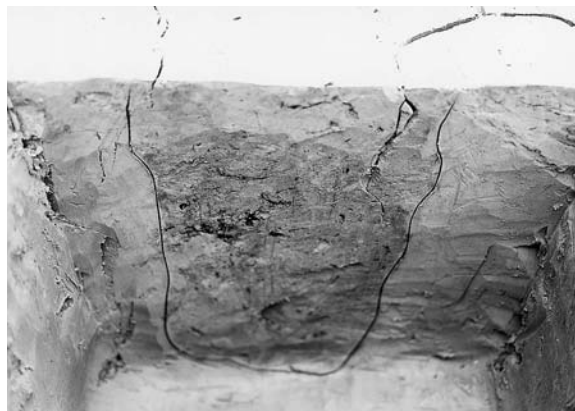
Bセクション断面写真



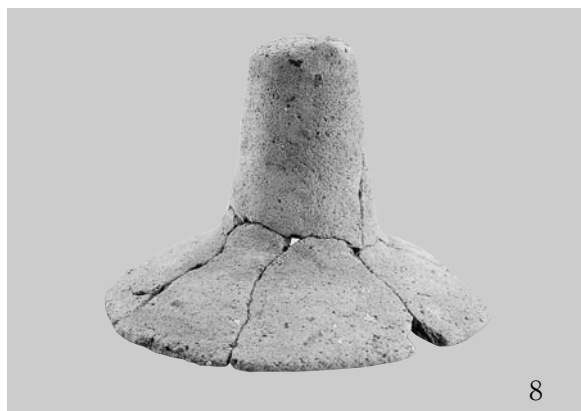
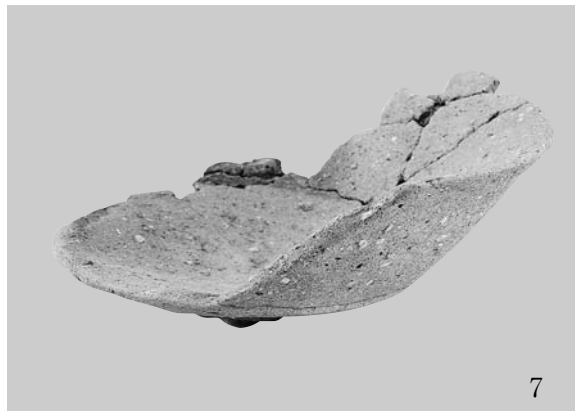
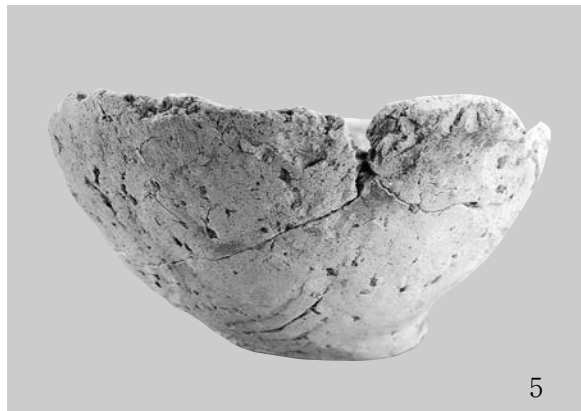
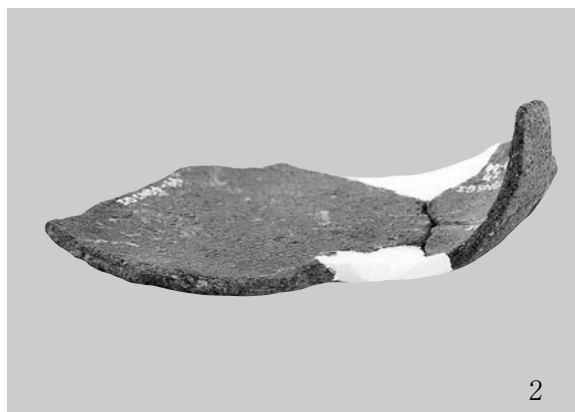
- 3セクション断面写真



pit完掘状況

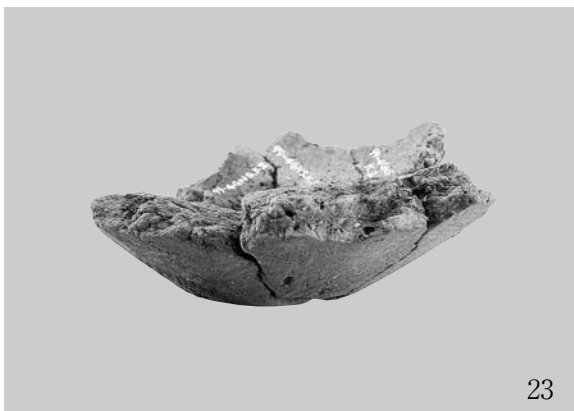
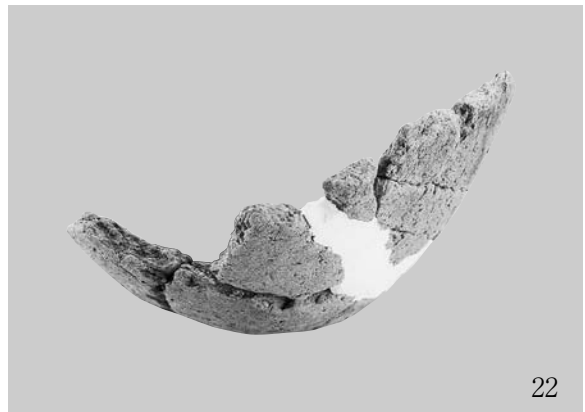
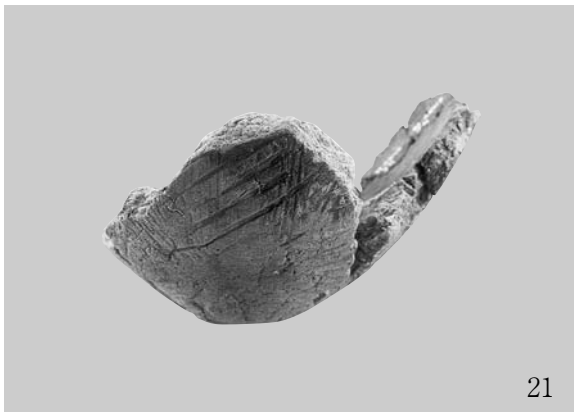


P5セクション



出土遺物

PL.4



出土遺物



出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな		ぐどうなかやまいせきぐん にのに						
書名		具同中山遺跡群 - 2						
副書名		県道中村下ノ加江線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書						
巻次								
シリーズ名		高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号		第56集						
編著者名		久家隆芳						
編集機関		(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター						
所在地		高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL 088-864-0671						
発行年月日		2000年11月30日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °	東経 °	調査機関	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぐどうなかやま 具同中山 いせきぐん 遺跡群	こうしけん 高知県 なかむらし 中村市 ぐどう 具同	39207	070052	35° 58 10	132° 54 28	平成11年 6月1日 ~ 平成11年 8月31日	345m <sup>2</sup>	県道中村 下ノ加江 線建設に 伴う事前 の発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
具同中山遺跡群	祭祀跡	弥生時代後期 終末~古墳時 代前期初頭  古墳時代中期	ピット 土坑	弥生土器 土師器 須恵器				



高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第56集

---

## 具同中山遺跡群 - 2

県道中村下ノ加江線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書

---

2000年11月30日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原南泉1437 - 1

Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社